

下部内視鏡検査時の下肢保持具の作製

九州大学病院 光学医療診療部

○中村あすか 小柳亜衣 大保つかさ 清藤美子 山本直子 藤岡審 清水周次

【はじめに】

A 病院では年間約 4,500 例の下部内視鏡検査を行っており、その半数以上が鎮静下で検査を行っている。下部内視鏡検査ではスコープ挿入を容易にするために、患者の体位変換が必要である。仰臥位では膝を立てた状態を保持するのが一般的であり、スコープ操作の妨げとならないように看護師が下肢保持の介助を行っているが、介助中は手が離せないために生検や他の看護業務に支障をきたすことが問題となっていた。そこで、鎮静下においても介助を要さず検査を行えるような下肢保持具（以下、保持具）を独自で試作した。

【研究目的】

下部内視鏡検査における保持具の有用性を検討する。

【研究方法】

調査期間：平成 29 年 12 月 1 日～平成 30 年 1 月 15 日

調査対象：保持具を使用して下部内視鏡検査の介助を行った看護師と実施した医師。

調査方法：鎮静下に下部内視鏡検査を受ける 50 名の患者に対して保持具を使用した。保持具の設置は看護師が行い、設置した看護師と検査を実施した医師にそれぞれ聞き取り調査を実施した。

倫理的配慮：聞き取り調査の回答は個人が特定できないように配慮した。

調査結果は研究以外の目的で使用せず、終了後はデータを破棄することとした。

【結果、考察】

保持具を用いて検査を受けた患者は、年齢：28～80 歳、体重：37.6～75.8kg、男女比：1:1 であった。保持具の設置は内視鏡室での実務経験が 3 ヶ月～4 年の看護師が行ったが、全員が問題なく設置することができた。看護師への聞き取り調査の結果、保持具設置時には全例が「下肢が保持できた」と回答し、さらに 90%の患者は検査中に下肢保持の介助を必要としなかったため、保持具が円滑な検査を実施するために有用であったと考えた。続いて、医師の満足度を調査したところ、「満足している」「まあまあ満足している」が 90%、「どちらともいえない」「あまり満足できない」「満足できない」が 10%と評価が高く、また、全員が「今後も継続して保持具の使用を希望する」と答えた。今後、今回の試作品を基に実用化に向けて更なる検討を進めていく予定である。

【結語】

下部内視鏡検査時の保持具を考案、試作した。試作した保持具は円滑な内視鏡検査の実施に有用と考えられた。